

ユニセフ子ども物語

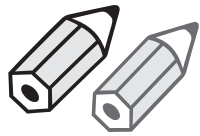
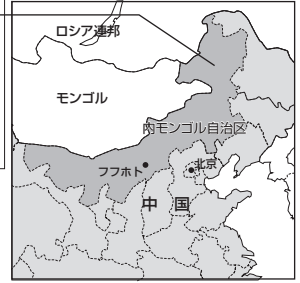
地球に生きる子どものくらし

China : Inner Mongolia

中国 内モンゴル自治区

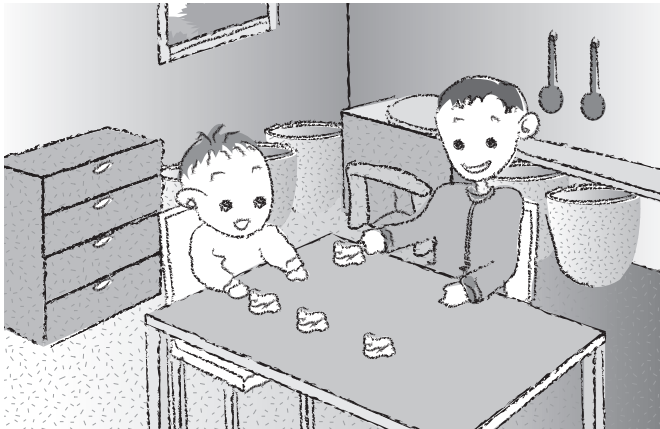


地図は参考のために掲載したもので、国境の法的地位について何らかの立場を示すものではありません。

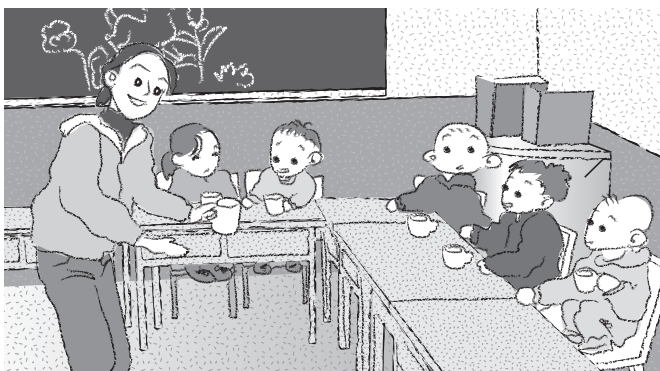


幼稚園と実験小学校に通い始めた兄弟

ユンポー（6歳）とユンクン（3歳）は中国の内モンゴル自治区に住む兄弟です。二人の家は農家で、トウモロコシを育てたり、牛や羊を飼っています。両親が忙しいので、ユンクンの世話をするのはユンポーの仕事でした。お母さんの仕事の都合で、お昼ごはんが遅い時間になったり、夕方まで二人だけですごす日がほとんどでした。



村にユニセフの支援で幼稚園ができ、ユンクンは今年から幼稚園に通うことになりました。幼稚園では、子どもたちは先生のピアノに合わせて歌ったり、いろいろな遊びを教してもらいます。お昼にはみんないっしょに給食を食べたあと、きれいに掃除された部屋で昼寝をします。毎日のおやつも楽しみです。ずっと家にいることになれていたユンクンは、最初、幼稚園に行くことをいやがりましたが、だんだん幼稚園に行くのが楽しみになっていきました。



ユンポーも、町の小学校へ自転車で通い始めました。ユンポーの小学校は「実験小学校（パイロットスクール）」に指定され、ユニセフや政府の支援で、自然災害や環境保護、子どもの権利に関する特別な指導を行っています。学校が行ったサマーキャンプにはユンポーも参加し、ほかの子どもたちといっしょに植林やゴミ拾いの活動をしました。学校では、交通事故にあわないようにするための知識も教えてくれます。



「ゴミや汚い水を川に流してはだめなんだよ」ユンポーは学校で習ったことを両親にも教えています。両親は、ユンクンやユンポーがさまざまな体験を通してどんどん成長していく様子に、子どもが小さい頃から教育を受けさせることの大切さを実感しています。

〈文・構成：（財）日本ユニセフ協会〉

中国は960万平方キロメートル(日本の約26倍)の広大な国土に約56の民族が住む多民族国家です。地域によって地形も気候も異なるほか、沿海部と内陸部、都市部と農村部の格差の拡大が大きな問題となっています。中国北部、モンゴルとの国境に位置する内モンゴル自治区では、経済の立ち遅れとともに、草原の砂漠化など、環境問題も深刻化しています。

教育の地域格差を埋めるための支援活動

内モンゴル自治区の教育事情

内モンゴル自治区のイジンフォルオ郡は中国の貧困地区に指定されていますが、2001年からユニセフと政府の共同教育事業が開始され、小学校および就学前の子どもの教育の普及に力が入られるようになりました。プログラム開始前と後を比較すると、学校数や学校に通う子どもの人数が増加したほか、水飲み場の整備や本・楽器・玩具の充実、専門教師の増加など、学校環境や教育の質も向上しています。

	幼稚園就学人数	幼稚園就学率	全教員のうち 専門教師の占める割合
プログラム導入前	2,006人	66%	45%
プログラム施行後	2,967人	73%	71%

紅慶河(ホンチンハー)村の幼稚園

2002年2月、イジンフォルオ郡のホンチンハー村では、ユニセフの支援プログラムで、地域の就学前教育を充実させるため、幼稚園ができました。

幼稚園には、2歳から5歳まで、74人の子どもたちが通っていて、朝8時から午後4時半まで幼稚園で過ごします。子どもたちは絵を描いたり、運動をしたり、歌を教わるだけでなく、友だちを作ったり、集団行動の中で自律心を養うことも学びます。園内には、教室、遊戯室、音楽室、調理場、食堂のほか、園児たちが昼寝をする部屋もあります。



子どもたちが昼寝をするのに使う部屋。家が遠い子どもは、月曜日から金曜日までは幼稚園に寝泊りし、週末だけ自宅に帰ります。 ©日本ユニセフ協会

幼稚園ができたおかげで、地域のおとなたちの間にも幼児教育の大切さが認識されるようになりました。開園当時は37人だった子どもが、2005年には2倍に増えました。ただ、まだまだ教材や遊び道具、教師の数は不足しており(園児74人に対し、教師3人)、教育の質のさらなる改善が今後の課題となっています。



形や大きさの異なるビーズをひもに通す遊びを教えてもらう子どもたち。集中して指先を使うことによって、細やかな手先の訓練になります。 ©日本ユニセフ協会

イジンフォルオ郡の実験小学校(パイロットスクール)

この小学校は、2001年、政府の教育改善プログラムを実施するパイロットスクールに認定されました。以来、ユニセフとの共同プロジェクトにより、子どもたちに自然災害や交通事故、子どもの権利に関する指導が行われています。早ばつ、暴風、雪嵐、砂嵐など、さまざまな自然災害に見舞われるこの地域では、子どもたちにも災害に関する知識をもたせることはとても大切なことです。



実験小学校の授業風景

©日本ユニセフ協会

現在は各学年3クラスで、1,122人の生徒が在籍しています。通常の授業のほかに、自然災害や、交通事故に遭わないための知識を身に付けるための指導も行われています。

また、この地域特有の問題として、草原の砂漠化や大気汚染などの問題をとりあげ、環境保護の意識を高めています。全校生徒による植林体験やゴミ収集活動が行われたほか、学校の環境保護コンテストには生徒の親たちも参加し、子どもたちを通じて、環境保護運動が少しずつ地域のおとなたちにも広がっています。



全校生徒が受けるテスト。選択式の簡単なテストですが、災害や交通事故などに対処するのに必要な知識を確認するために役立っています。 ©日本ユニセフ協会